

遠藤周作の『青い小さな葡萄』論

－ <青い小さな葡萄>の象徴的な意味を中心に－

陸根和*

目次

1. はじめに
 2. 作家の小説観
 3. 人種の問題と悪の問題
 4. <青い小さな葡萄>の意味するもの
 5. おわりに
-

1. はじめに

作品『青い小さな葡萄』は、1956年1月から6月まで『文學界』に発表され、同年12月新潮社から刊行された¹⁾。この小説は『フランスにおける異國の學生たち』(1951年9月、『群像』)の題で書かれた『フォンスの井戸』を原型にしている。

『フォンスの井戸』は、遠藤がフランス留學中リヨン大學の友人アンドレアとアルデッシュのフォンスの井戸を訪ねた實体験をもとに書かれた短編小説である。この『フォンスの井戸』に作家的なフィクションを加え長編小説として書き直した作品が『青い小さな葡萄』である²⁾。

『青い小さな葡萄』には、遠藤文學の初期作品世界だけではなく、全生涯を通して探り続け試みたテーマカトリック作家としての小説観、人種差別の問題、人間の肉体の問題を含めた悪の問題などが書かれている。そういう面において『青い小さな葡萄』は、遠藤文學を方向付

* 大田大學校 日語日文學科 副教授 日本近現代文學

1) 『青い小さな葡萄』のテキストとしては、『遠藤周作文學全集』第1巻 長編小説 I 『青い小さな葡萄』新潮社 1999.4刊行使用。

2) 『遠藤周作文學全集-「作家の日記」』第15巻 新潮社 2000.7 pp.83~85
この日記によると、遠藤がフォンスの井戸を訪ねるために一人でリヨンを發ったのは、1951年3月21日(金)のことである。友人アンドレがヴァル＝レ＝バンに迎えに来て、23日に二人でフォンスの井戸を訪ねている。しかし、作品『フォンスの井戸』には、遠藤、クロスヴスキイ、イレーナ三人、『青い小さな葡萄』には、伊原、ハンツ、クロスヴスキイ、エバ四人が井戸を訪ねている。

けたものとして見逃すことのできない作品であると考えられる。

かかる作品の中で示した〈青い小さな葡萄〉とは、遠藤にとってどういう意味を持っているのだろうか。本稿では、各テーマに沿って作品の分析を行ない、〈青い小さな葡萄〉の象徴する意味合いを考察してみることにする。

2. 作家の小説観

遠藤は、評論家として出発をとげたが、フランス留學中にカトリック作家に轉身しようとして、モーリヤック、グレアム・グリーン、リルケらの小説技法の修得に努めた。彼は、戦後最初のカトリック留學生として約2年半ぐらいフランスに滞在している³⁾。『遠藤周作による遠藤周作』にも詳しく書かれているように、遠藤のフランスでの留學生活は、まさに作家修業の場になりえたと言える⁴⁾。

遠藤の小説観を知るためには、先ず留學以前に書かれた評論『神々と神と』と『カトリック作家の問題』とを見逃すことはできない。

カトリック者の本来の姿勢は、東洋的な神々の世界の持つ、あの美しい受身の世界ではなく、戦闘的な、能動的なものです。彼が戦い終わって、その靈魂をかえす時にも、神の審判が待っています。永遠の生命か、永遠の地獄かという、審判が待っています。カトリック文學とは、こうした人間の戦闘や、歡喜や苦惱を描くものです。(『神々と神と』⁵⁾)

カトリック作家は決して聖人や詩人ではない。聖人や詩人の目的は、ひたすら神を頌め歌うことにある。けれどもカトリック作家は、作家である以上何よりも人間を凝視するのが義務である

3) 遠藤は、二度にわたってフランス留學を体験している。一度目は、フランス現代カトリック文學を勉強するために、戦後日本初のカトリック教會の留學生として、1950年6月から1953年2月まで約2年8ヶ月間(滞仏期間は2年半)、主にリオンを中心に留學生活を送っている。二度目の留學は旅行といってもいい短期間のものであったが、サド研究補充のため妻を伴って、1959年10月渡仏し、サド研究家たちに会う。その後、イギリス、スペイン、イタリア、ギリシア、エルサレムを経て1960年1月歸國する。本論文では、一度目の留學の影響に限って論じるつもりである。

4) 『試みの自畫像・1 遠藤周作による遠藤周作』青銅社1985.6

この著書には、遠藤の生れ年1923年から56歳の1979年まで年報の形をとって記されている。一度目のフランス留學については、pp.68～87までである。『出世作のころ』の中で、「孤獨で辛く、金もなく、最後に咯血するという留學生生活だったが勉強だけはかなりやったと思う」と回想している。

5) 遠藤周作『石の聲』冬樹社1970.12 p.104 初出は、「四季」1947.12

『神々と神と』は、24才の遠藤が初めて世に出した處女作として、カトリシズムと堀辰雄の文學で見られる東洋の汎神論と西洋の一神論の對比をテーマにしている。この作品はカトリック詩人である野村英夫宛に送った告白体の手紙形式を取り、「N・H様」と呼んだこの詩人にカトリック作家としての苦惱を吐露している。

り、この人間凝視の義務を放擲する事はゆるされない。(『カトリック作家の問題』)⁶⁾

この二つの評論『神々と神と』と『カトリック作家の問題』は、東洋の汎神論と西洋の一神論との対比とフランスカトリック作家への分析を通して、カトリック作家としての文學観を克明に表わしている作品である。

それでは、留學以前からはっきりしたカトリック作家としての姿勢を整えていた遠藤が、留學中の實体験をもとに書いた『青い小さな葡萄』では、小説観をどのように表明しているのか、調べてみよう。

仏蘭西に来て色々なものを眺め、色々な事件にぶつかった。ぼくはそれを掴まえようとする。白い紙の上に書こうとする。

すると、そういう時でもこのきいろい色と日本人とが、ぼくの眼の邪魔をするのだ。最初から、ぼくは日本人として、黄色人として万事を眺めざるをえない。カメラの位置は其處にきまってしまう。

カメラの位置がきまっていれば、万事はいつもある角度からしか捉えられない。屈折が付き、辻褄があってしまう。

けれども今日のような時代には、巷で出會った些細な出来ごとでも歩道ですれちがった見知らぬ人間もみな謎をもっている。その謎はあまりに複雑なので分析したりある辻褄をつけたりしては割りきれない。

そういう現実をうつしだす小説はもう、カメラの位置を最初から決めることはできない。この酒場で起る出来ごとと同じことだ。位置をえらんではいけない。黄色人とか日本人とかの立場をぼくの眼からとり除かなければならない。(p.15)

遠藤は、黄色人とか日本人という立場を離れて、カメラの位置が固定していない「白い紙」の上に人間を凝視し、小説を書きたがっている。そのためには何よりも偏見の目を排除することである。しかし、東洋の汎神論的な風土のなかで育った遠藤にとっては、西洋の一神論的な風土はあまりにも溶け込みにくい世界に映ったようである。彼は、エッセイ『私とキリスト教』の中で、「キリスト教の伝統も文化も歴史も全くない日本に生まれ、心の中ではキリスト教にどっぷりつかることのできない、むしろキリスト教と相反した感覚が隠されているという事実を、私は青年時代になってやっと悟った。このような感覚は<神と罪と死>に對する無感覚として現れてキリスト教に對する距離感を感じるようになった」と吐露している⁷⁾。

6) 遠藤周作『石の聲』冬樹社 1970.12 p.105 初出は、「三田文學」1947.12

『カトリック作家の問題』は、『神々と神と』と同じ時期に發表された處女評論として、フランソワ・モウリヤックを中心にしたフランス・カトリック作家についての分析を通して、カトリック作家が歩まなければならない道を提示している。

7) 前掲書『遠藤周作文學全集』第12巻 評論・エッセイ I pp.304~308 整理筆者

遠藤の感じた二つの世界の異質感は、東洋の汎神論的な風土での日本人は神と自身との間に、さらに人間と自然との間にいかなる対立も感じない受動的な姿勢として説明する反面、一神論である西洋にとっての神と自然は常に人間と距離を置き、離れたまま死ぬ日まで葛藤し、戦わねばならない対立の関係からくるものである。

このような自覚は、カトリック作家としての遠藤自身の宗教的立場を確認する必要性から、もう一つは、東洋と西洋の精神世界の差異を明らかにし、カメラの位置が固定される危険性を取り除くためのものであると考えられる。

それに、今の人間で性格のある者なんているだろうか。たとえあるにせよそれは決して一つの性格や二つの性格ではありはしない。大切なことは性格や心理を描くことではなく、彼の魂をかくことじゃないのか。(p.26)

人間の持っている精神世界は意識だけではなく、無意識の領域に深く根ざしたものであり、それは意識の奥に隠された部屋々に様々な思想を宿しているのだと思われる。その奥に隠された部屋々は、「魂」の領域であり、それは個人的な無意識のほかにその人間が属している社会の集合無意識が内在している領域でもある⁸⁾。その集合無意識の中には何万年にもわたる祖先からの心の歴史や心の体験が働いていると思われる。

一般的にモーリヤックやジュリアン・クリンのようなキリスト教作家たちは無意識の領域に閉じこもっている魂への見方は、暗い、陰気な、閉鎖的な領域しか認めていないようだが、遠藤はユングの立場に立って、その反対の開放的で積極的な意味をも持っていると思っている⁹⁾。

しかし我々は自分を装って社会生活を営んでいる。遠藤は、こうした意識的につくられた自己の奥に、すなわち無意識の魂の領域に隠れているもう一つの自己を凝視し、書かねばならないといっているのである。それは、社会生活の中で現れる表面的な一つや二つの性格や心理ではなく、魂の世界を書くことによって、眞の一人の人間の姿を正しく描き出せるのではないかという意味合いである。

結局、遠藤がカトリック作家として追求しているのは、カメラの位置をどこにも固定しないということ、そこで神でも天使でもない人間を凝視し、黄色人とか白人とかという外的条件に拘らない一人の人間として、その奥に隠れている魂の領域を描き出すことである。

このような試みとして書かれた『青い小さな葡萄』は、留學中に模索してきたカトリック作家としての姿勢や主題、創作方法、創作することの意義、決意などが、遠藤文学の小説において直接記された唯一の作品であると言える¹⁰⁾。

8) 集合無意識とは、我々一人一人の心に隠された人類のながい心の遺伝であり遺産である。祖先から各世代に伝わった心の遺伝が共通しているからこそ、我々は昔の世代とも、また文化伝統のちがう別の民族とも芸術的宗教的感情と感動をわかち合うことができるのである。

9) 遠藤周作『私の愛した小説』新潮社 1988.9 p.98

3. 人種の問題と悪の問題

遠藤が、留學を通して目覚めた新しい精神世界の実践の場として選んだのは、評論家から小説家への変身であった。その試みの初期の作品である『青い小さな葡萄』には、二つの大きなテーマが語られている。本節では、その二つのテーマである人種の問題と悪の問題を作品の分析を通して考察してみようと思う。

『青い小さな葡萄』は、リヨンの小さな飲み屋のコサック亭で、アルバイトをしながら小説家を志す日本人留學生「伊原」と、元ナチ兵だったドイツ人留學生「ハンツ」との出会いを中心に展開される。

「ハンツ」は、戦時中右腕を射たれ、負傷した彼にヴァルツの青い小さな葡萄をくれた「スザンヌ・パストル」という娘のことが忘れられず、6年ぶりにドイツからリヨンにやってきたのである。

「伊原」にとって「白い國」フランスで向き合っている一番大きな問題は、皮膚の色による黄色い人として受けなければならない人種差別の苦澁である。

彼は、アルバイト先の酔客から黄色い人であるために卑しめられ、侮辱されている。

「全く氣にくわねえな。お前にいじられたコップならきいろくなるだろうよ。俺はきいろい指でいじられたコップで酒は呑みたくねえんだ」(p.10)

彼は雨に濡れた掌をじっと見詰めた。このきばんだ瘦せこけた掌は裁かれた者の手であり追放者の手だった。こすっても、こすってもそのきいろい色はきえなかった。決して白くは変らなかった。(P.17)

(たとえ、客の一人が盗んだにしろ、疑われるのは、まず、俺なんだ。これが、黄色い人であると言うことなんだ)(p.41)

「伊原」は、「このきいろい自分の皮膚が恥ずかしい。日本人であることもいやでたまらない」「お前はきいろい。お前はきたない、お前は日本人だ」というひどい劣等感に襲われている人物である¹¹⁾。「きいろい」というフランス語には「疑わしい」という意味もあるという。(p.44) このような「伊原」の心には、戦犯國日本からの留學生という暗さが強く意識されている。そこには、

10) 「小説の時間は辻褄のあう過去にむいているのではなく辻褄のあわぬ未来にむいている」(『青い小さな葡萄』 p.15) 遠藤の小説観を知ることのできるエッセイとしては、『遠藤周作全集』第12巻『私の小説作法』『小説家と批評家との間』『芸術の基準』、第13巻『小説技術についての雑談』『現代日本文學に對する私の不満』などの多数がある。

11) 作品の中では、数えきれないほど數十ヶ所で黄色い人としての劣等感を出している。

留學中、絶えず冷やかな視線を受けなければならなかった遠藤の痛切な体験が投影されているのである。

「伊原」が友だち一人いない白人の世界で、ドイツ人の「ハンツ」と親しくなったのは、ほかならぬ戦争を起こした犯罪國の人間としての共犯者的な親近感を感じたからである。しかし、戦争が終わった東京で、知り合いの何人かのドイツ人が共犯者であるにもかかわらず、ただ白人であるということのゆえに何の抵抗も摩擦も受けることなく征服者たちの世界に見事に溶け込んでいったことを思いだし、「ハンツ」にかすかな憎しみを感している。

「伊原」は、「ほんとうにこのハンツは俺の肌の色に無感覺なのだろうか」と絶えず疑問を抱きつつ、結局「ハンツ」の口から「黄色い人のくせに」ということばが出たとき「ハンツまでが」という絶望感に伴った深い痛みを覚える。

「伊原」が感している黄色と白色とのイメージはどういうものなのだろうか。

じめじめとした雨のなかですべてがほやけ、輪郭を失い、誤魔化されていくのだ。生氣のない濁った色に変えるのだ。

きいろという色はそういう色なんだ。こいつは白色のように、他の色と鮮やかに對立し、自分の存在を主張し距離をはっきりさせる色とはちがうんだ。影と光との對立も、厚さも深みもない色なんだ。(p.44)

幼児洗礼を受けた遠藤にあって、フランスという白人の世界はキリスト教の教えがいきいきと息づいている理想的な國としての位置を占めていた¹²⁾。西洋世界で作られた神の國が現實世界で教會を通した秩序の中に脈々と流れているのだろうという憧憬が、敗戦後の遠藤の絶望感の中でさえ、生の方向を提供してくれたと考えられる。

しかし、フランス留學で目にした「白い世界」は、國境や人種を超越した自由・平等・博愛というカトリックの普遍的な精神が、西洋の価値觀を基準とした白人だけのための思想として取り入れられている現實であった。彼が受けた「白」に對する有色人としてのイメージは「惡＝罪」に通じ、西洋文化の中で黄色人と呼ばれた自分自身に對する劣等感と深刻な葛藤は、乗り越えがたい孤獨な体験であったと思われる¹³⁾。

作品『青い小さな葡萄』で見逃すことのできないもう一つのテーマは、人間の惡の問題であ

12) 陸根和『遠藤周作におけるイエス像序説』實踐國文學 第四十号 1991.9 参照要望。

13) 遠藤は、人種問題について『有色人種と白色人種』(前掲書『遠藤周作文學全集』第12卷 p.219)の中で、次のように語っている。

「人種問題を苦しめているのは優越感を持っている白人側だけの責任ではない。自分の皮膚の色を恥じ、容貌の粗雑さを恥じるの余り、白人にみられよう、自分の肉体を忘れようとする有色人側にも罪があるのだ。〈省略〉だから我々は我々と自分の人種との肉体に社會的、芸術的責任があるのである。自分の肉体を消し、透明な抽象的人間になることは責任を捨てたことになる。各人は各人の精神と肉体の十字架を背負わねばならぬ」

る。それは、「フォンスの井戸」と題された新聞記者の手記を通して、マキの内部に秘められた醜悪な政治的権力闘争の事実を暴露することによって明らかにされている¹⁴⁾。それは、抗獨運動のマキが、ドイツ人ではなく、同胞であるフランス人を拷問、虐殺して井戸に死体を投げ込んだという事件が中心になっている。

二週間以来、アルデッシュ県を恐怖が支配している。それはナチスの軍隊によってではない。悲しいことに我々抗獨運動者の仲間だったものが、民衆にたいして恐怖政治を布いているのだ。悪への憎悪が逆に悪を生んでいるのである。〈中略〉

私はながい間抗獨運動を人間の正義の象徴だと考えてきた。思想や主義こそ違え、基督教徒も共産主義者もヒューマニストもナチズムという暴力に對して手を握って戦う美しい運動だった筈である。それが今日、この醜い人間本能、権力争奪の前に穢れつつあるのだ。(pp.67~68)

これは、リヨン新聞社の記者「モンドン」という人が暴露した記事の内容である。彼は、この記事を書いたせいで、所屬していたマキ団からも、社會からも退けられ抹殺されてしまった。「モンドン」の知り合いの「ブロンベルジェ」は、良心的な葛藤を感じながらも、マキの弾壓に沈黙を守っている人で、彼は「伊原」にこうつぶやく。「事実を書いたとしても、力を持ったマキの支配下では、マキ団に害を与えたなら、それは悪とみなされても仕方ない」(p.61)と。

「ブロンベルジェ」は、「私たちが抗獨運動を通して歴史を創っているなら、歴史は悪をも利用する」(p.68)「すべての効果が善とは限らない。しかし効果のない行爲は悪である」(p.69)と皮肉な聲で説明し、「モンドン」は「彼はあの政治行爲の効果性のために人間の魂を賣っているのである」(p.68)と嘆いている。

マキ事件に關連しての「モンドン」の告白―「集團の善と個人の善との食い違いをどのように調和するのか、私にはわからないのだ」(p.69)―には、力のない正義は正義ではないと言われてるように、人間の不條理に對しての遠藤の悲痛な訴えが秘められていると思われる。

マキ事件を知った「伊原」は、犯罪國の黄色い人に對して、常に優越感を持っている「白い世界」の西歐人に對し、「お前たちだって、やったじゃないか」(p.72)と同罪者意識を持つようになる。

ここには、歴史的に戦争を起こした犯罪國民という烙印を背負って生きなければならない一人の人間としての遠藤の怒りが感じられる。

日本人の乗船していることを聞き伝えたフィリッピンの群衆が岸壁に群をなして集まってきた。伊原は仏蘭西人の船長の命令で家畜の臭いのする眞暗な船艙にかくされた。けれども暗闇のなかで、彼は群集が聲をあわせ、ただ一つの日本語を怒号するのを聞いた。「ヒトゴロシ、ヒ

14) マキは、共産主義系の反ドイツ運動者をさしている。

トゴロシ、ヒトゴロシ」やがて、それらは憤怒とも呪詛ともつかぬ大きな合唱となっていった。
「ヒトゴロシ、ヒトゴロシ、ヒトゴロシ」(p.17)

フィリピンだけではなく、「伊原」がフランスでふれる人々は、彼を日本兵の共犯者として眺め追いかけている。アルバイト先のコサック亭でも、日本人の收容所にいれられたミッシェルの弟の話「日本兵はあいつが水をくれと言うと塩水を飲ませて笑っていた」(p.14)をしながら罵っている。そのたびごとに「伊原」は目をつむるほかには客たちの残酷な視線から逃れるすべはなかったのである。

頭の奥で憎しみとも恨みともつかぬものがブツブツ言っていた。(お前たちだって原子爆弾を使ったじゃないか) なぜ君等白人はぼくをきいろいと罵るんだ。どうして、だれが俺の環境をあんな国においたんだ。兎に角、俺ではないほかの日本人だ。(pp.16~17)

戦争犯罪国の国民であるというだけの理由で、受けなければならない非難の聲に「伊原」はどうしてよいのかわからない。「ただみしらぬ外國、みしらぬ都會のなかで日本人であることを誤魔化し、一人の旅びととしてふるまうのが一番氣樂に思っている。無数の人間の森に身をかくしぼやけた灰色の存在」として生きてがっている。

「伊原」は、戦争を起こしたのは俺ではないと、訴えているのだが、血のつながった同じ民族ということで裁かれているのである。

人間の歴史は、戦争の歴史である。その戦争の歴史の中で、人間の恐ろしいほどの残忍性は、想像を絶するものである。この作品に登場しているこびと「クロスヴスキイ」も、人間の悪の存在の証として登場している人物である。彼はナチスのニューエンベルグ收容所で一年間も小箱にいれられ奇形のこびとになった青年である。ナチスの看護婦は、何故体をまげてしか入れない小さな箱に少年を入れたのだろうか。作品の中では、「お前は人間じゃないから、こうして箱に入れるんだよ」(p.30)と冷ややかに語られている。

こびとに関するもう一つの話がある。ある日同じナチスの看護婦は、熱をだしているこの少年に「さあ、お飲み、すぐ、よくなるよ」(p.45)といい、少年が飲み終わった瞬間、小聲でささやく。「お前はもうすぐ、死ぬよ。それは動物を實驗する毒藥なんだから、死んだって、ここじゃ、だれもお前を悲しんでくれる者なんかいないだよ」(p.45)と。少年は脂汗をながしながら死の恐ろしさと戦っていた。人間として「ただ見てたのしむために」十一の少年に加えた行爲とは信じたくもない事實の話である。戦争は終わり、再び平和が訪れてきても、こびとの体と心に刻まれた深い傷は永遠に治ることはないであろう。

マキ事件の現場であるフォンスの井戸を、登場人物「伊原」「ハンツ・ヘルツォグ」こびと「クロスヴスキイ」「エバ」の四人が訪ねる。その経緯の描寫には、讀者の心に恐怖や不安感をかき

立てるサスペンス的迫力があり、すでに遠藤の作家的力量が十分にうかがわれる。「エバ」は、こびとと同じポーランド人で、同胞がドイツ人から踏み躪られている時、ドイツ人と一緒に寝たと、こびとから常に苛められている人物で、彼らの共通点は戦争による深い傷を負っているということである。

「ハンツ」を助け青い小さな葡萄を与えてくれた「スザンヌ」もマキによって殺されフォンスの井戸に葬られたようである。作家の分身とも言える「伊原」は、十数人が拷問、虐殺され投げ込まれた真暗なフォンスの井戸を覗き込み、何を見ようとしたのであろうか。

(見ねばならぬ。よく見るんだ。お前の眼ではっきりと見るんだ) 伊原の頭の中でだれかがぶつぶつそう言い続けた。(見ねばならぬ。よく見るんだ)

彼は井戸の口に顔を近づけ、水滴のしたたる音を聞きながら、闇を直視した。(p.86)

井戸の中を覗き込んだ結果「伊原」に見えてきたのは「スザンヌを殺したものの、井戸の中に拷問、虐殺された人間を投げこんだものがピションの部下だけでない」ことであり、それはその背後に伊原が名づけることのできぬもっと巨大なもの、もっと怖ろしい冷酷なものがうずくまっているという悟りだったのである。

言い換えれば、その日「伊原」が覗きこもうとしたのは、井戸自体ではなく、人間の心の奥にある言いようのない真暗なもの、混沌とした無意識世界の巨大な悪の存在であったといえる。その悪の存在が現実的な条件の中で、働き掛け動きだせば、歴史だけが審判できる「政治的善悪と人間的善悪とは必ずしも一致しない」¹⁵⁾矛盾した事件も起りうるという事実への確認である。

作品に出てくる人物像には、被害者であると同時に加害者でもあるという背反したイメージの重複が造型されている。彼らは、すべて裁かれたものであり、また過去に人を裁いてきた罪を背負って歩きつづけていく者でもある。それが人間なのだ、作品『青い小さな葡萄』は物語っている。そこには、人種問題を越えた、悪の存在を内包しているすべての人間の実存の問題が問われている。

遠藤は、フランス留學を通して、矛盾した人間の営みの中で、白人でも有色人でも、また被害者でも加害者でも、差別することなく抱擁してくれる眞の救世主としてのイエスを渴望するようになったのである。

15) 作家は「ブロンベルジェ」の口を借りて、歴史の裁判を説明しながら政治的善悪と人間的善悪の基準に関連して次のように語っている。

「私の言っているのは、道徳があり、善と悪との基準がはっきり定まっている裁判じゃない。世界にはもう一つの裁判がある。未来だけが裁くことのできる裁判だ。〈省略〉歴史というものは、一度使った者も必要としなければ、すぐそれを悪とみなす力を持っている。私の言うのは歴史の裁判だ」(p.59)

4. <青い小さな葡萄>の意味するもの

宗教における葡萄の意味性は、一般的に神の恩寵の象徴であると考えられている。また聖餐に用いられる葡萄酒は、キリストの犠牲の血を象徴する。

作品の中での葡萄は、「ハンツ」が1944年にヴァランスで、逃げ遅れマキに右腕を射たれ、廃工場にかくれた時、彼を見つけた一人のフランス人の娘が、救命袋とく青い小さな葡萄>とをくれたことが発端になっている。その救命袋には、「スザンヌ・パストル、ルーフ・ドルフ街、リヨン」と書いた名札がついている。「ハンツ」は極限の状況の中で、助けをもらったその娘のことが忘れられない。

しかし、「スザンヌ・パストル」はすでに死んでしまったというこびとの話に、「伊原」と「ハンツ」は、彼女の死の確認のため、ヴァランスの墓地を訪れる。ところが、二人は彼女の墓を見つけたものの、その死亡の年は「ハンツ」に會った1944年ではなく、1942年になっている。結局彼女の死は確實なものではなく、彼女のあとを追えば追うほど謎に包まれていく。「伊原」は、「スザンヌ・パストル」と書いてあった墓は空のものなのではなかろうかという疑問にかられ¹⁶⁾、眞實を究明するため、フォンスの井戸まで訪れる。それぞれ心の中に、消すことのできないどす黒い暗黒なものを抱えている三人―「ハンツ」、こびと「クロスヴスキイ」、「エバ」も同行する。

彼らは何故、「スザンヌ・パストル」という存在を執拗にまで探そうとしていたのだろうか。それは本當に存在しているのだろうか。結局彼らにとって<青い小さな葡萄>というものは何を意味しているのだろうか。作品『青い小さな葡萄』の一番大きなテーマは、まさにここにある。

本作品における<青い小さな葡萄>の初登場は、「伊原」のアルバイト先のコサック亭で、「伊原」と「ハンツ」の二人がバター飯を一緒に食べたあと、「ハンツ」が白い皿から一房の葡萄を取りだした場面からである。

「ああ、ヴァルツの葡萄だ」と彼は叫んだ。「アルデッシュ県だけ採れる葡萄だろう」

それは青い小さな葡萄だった。マスキュー葡萄に似ているがそれよりもずっと小さくハンツの太い指の下で今にも碧い水滴となってこぼれそうだった。

「こいつはあまり雨も太陽もいらなんだよ。アルデッシュのようなかたい不毛の土地には、もってこいなんだな」(p.28)

<青い小さな葡萄>が、不毛の大地に育つということは、この作品において大きな意味合い

16) 「伊原」に問い詰められた「ブロンベルジェ」は、苦しまぎれに次のように言って、暗に墓には彼女の死体がないことを告白する。

「そうかもしれん。そうでないかもしれん。どっちにしても同じことだ。スザンヌは行方不明になった。おそらく獨逸兵に殺されたのだろう。そう考えるのが、なぜ、いけない。だから、私たちは彼女を墓地に葬った。今更、墓を掘りかえし、暗闇にかくれた彼女をあばく必要もない」(p.59)

を内包していると思われる。なぜなら、それは人間のすべてのものが育たぬような非情な現実を象徴しているからである。不毛の土地でこそ、實を結ぶということは、最悪の条件のなかでもくじけることなく、忍耐強さを持っているという意味であり、それは乾ききった絶望の中で稔る美しい希望の葡萄を示しているからである。登場人物たちは、各々の思いの内に、地上の希望の象徴的な存在である「スザンヌ・パストル」を通して、戦争という極限の状況のただ中でも失わなかった、人間の内に秘められている「光」の存在をもとめているのである。現実の非情な重荷を背負いきれない四人であるからこそ、人間性の善良さの証を示している〈青い小さな葡萄〉を探さずにはいられないのであろう。

次に各人物の心境を本文から抜粋してみよう。

あの人間の河のなかに青い葡萄を求めることの空しさ、愚かさを彼は仏蘭西に来て以来ながい間のうちに知っていた。疲労が重くその諦めの上のしかかっていた。(今度だけで終りにしよう)と彼(=「伊原」;筆者注)は心の中で呟いた。(今度だけで……)(p.51)

「俺(=「ハンツ」;筆者注)、この右腕のことを考えるたびに、死んだ仲間を思いだすのさ。あいつ等はこの右腕とおなじようにもう戻ってこない。お偉方がどんなスローガンや考えを述べたって、雨にうたれ、血だらけになり、死んでいった仲間は決して生きかえらないんだ。あいつ等は決してだれからも報われはしないんだ」(p.24)

拷問室、ガス部屋、絞首台も、雪に消えてしまうわけですか。〈中略〉だが、ハンツ君、もしガス部屋や絞首台で殺された幾十万人の人間たちが、この闇の中に集まって、叫びはじめたら、どうしますかね。彼等はあの収容所で受けた恐怖や死を償ってくれ、納得のいくまで償ってくれと叫んでいるんですぜ。

生き残った連中は戦争裁判や民主主義や未来の平和ですべてを始末したつもりか知らないが、死んだ人間の苦しみはそれだけじゃ、もとへ戻らない。(こびとの訴え;筆者注、p.52)

「ナチだってああしたんだろ。君と一緒に寝た時、ナチも……ね」(p.22)

「その時(=収容所でこびとが箱に入れられた時;筆者注)、君はなにをしていたの」

すると部屋の隅から、灰色の影のなかからひくい抑揚のないエバの聲がきこえた。まるで暗記していた台詞を呟くような調子で、

「ワタシハアタタカイネドコデネムリ

ワタシハオイシイモノヲタベ」(p.29)

現実の人間性に絶望し、引け目で心まで歪んでしまった四人であるが、地上の〈青い小さな葡萄〉への微かな希望を捨てることはできない¹⁷⁾。もし、万が一にもその希望がこの地上に存

在していることが証明されるのであれば、生きる希望の星となり強い支えとなるだろう。またそれは、人が苦しみながらも存在することの意味の回復ともなるはずである。なぜならば、人間の内部にあるのが邪悪なものだけでないという確認をすることは、救済の可能性があることに根拠を与えることであり、それは、ほかならぬこの世での苦惱にも意味が与えられるということであるからである。

粉雪のふるパール街を傘を斜めにさしにくたびれた表情で歩いていく人間の河。あの時、俺はその河に青い葡萄を求めるむなしさを感じていた。だが青い葡萄とは何處かにあるものではない。さがすものではない。創るものなのだろう。ハンツには逃れていく教會がある。が教會のない俺は創るしかないのだ。(p.88)

「ハンツ」にとっての〈青い小さな葡萄〉は、教會であり、それは神の恩寵の徴を意味しているのである。一方「伊原」は、「青い葡萄があるかも知れぬ、ないかも知れぬという生き方はもう澤山だ」と叫びながら、〈青い小さな葡萄〉は「さがすものではない。創るものなのだろう」といって、書くことに自分の〈青い小さな葡萄〉を見出していく。「伊原」にとってその始まりは、唯一の逃げ場だった〈青い小さなノート〉からである。こびとと「エバ」については、フォンスの井戸を訪れた最後の場面から推測できると思う。こびとは自虐的な行爲を行った「エバ」の膝の上で子供のように泣いており、「エバ」は母親のようにこびとの髪をなせている。同じ傷つけられた者同士の連帯感によって互いの傷をも癒すことができると思われる。こびとは、「伊原」と「ハンツ」には自分の体を人間の悪の証として見せ付けるためにいつまでも追い掛けていくつもりであるといい、また「エバ」に向っては、ドイツ軍に賣春をしたと罵ったものの、彼の切實な願いは、穢れたもの、汚されたすべてのものを包容する母親のような〈青い小さな葡萄〉の存在であろうと思われる。その母子像のような光景には、聖母マリアと御子キリストの姿も重なり、「白い人」の世界での教會が彼らの〈青い小さな葡萄〉の世界であることを暗示していると言える。

過去の記憶に悩まされ、現在も苦しみ続けている四人の人物が〈青い小さな葡萄〉を求めるのは、彼らの心の傷の癒しを必要とするからであり、絶望的な人間の未来に希望を抱きたいからであろう。

それでは、本作品の中心的な人物「伊原」にとって書くことは何のためであったのか。

だが、何故私たちは創るのか、それは我々が超絶的なものを慾するからだ。歴史的條件や人間的條件に限界つけられた現実をこえて私たちは自由や祈りや意志、即ち人間の「青い小さな葡

17) 「伊原」は、「今度で本當に最後にしよう」と繰り返し念をおす。「ハンツ」は、「俺は青い葡萄を地上に求めすぎるんじゃ、ないだろうか」という懷疑に陥っている。こびとも二人を嘲笑しながらも、最後まで二人のあとを追ってくる。病弱で周りのことに何の反応も見せなかった「エバ」までも、息苦しさを押さえながらフォンスの井戸までついてくる。

萄」に一つの造型を与えるのである。(『芸術の基準』)18)

結局、本作品における〈青い小さな葡萄〉は、宗教における葡萄の意味と同じように、人間を悪の深淵から救ってくれる希望の種子のように思われるものである。白い人の「ハンツ」にとっては、白い人の基準によって創られた教會がそれであり、黄色い人の「伊原」には、創造的な作業である書くことによって今後人種も歴史も越えた超絶的な世界の中で、〈青い小さな葡萄〉を見つけようとしている¹⁹⁾。それは、結局「ハンツ」の夢見ている世界―「ここ(=國境:筆者注)をきり開いて、あかるい日差しの良い土地にしたら、どんなに良いだろう」―と全く同じ世界に通ずるものである。

主人公「伊原」にとって文學は宗教と同じく、「國籍も人種もない人間の森」のなかで、普遍性を持ったものとして進めなければならない作業である。その中心は、人間の裡に秘められている魂の世界であり、その魂の世界に潜んでいる〈青い小さな葡萄〉、すなわち人間の救済への可能性が問われている。「伊原」にとって現実の逃げ場であった〈青い小さなノート〉は、フォンスの井戸の事件を通して〈青い小さな葡萄〉を見出す「創る」手段となり得たのである。

こうして考察を進めてみると、登場人物らすべてが切實に探し求めた〈青い小さな葡萄〉は、凡ての人間が人間である限り逃れることのできない「巨大で、怖ろしい冷酷なもの」と對抗する據り所となる、人間の救済の可能性への希求を象徴しているといえる。

それゆえ、作品『青い小さな葡萄』の世界が、苦しく暗い過去と現実であるからこそ、清らかに透き通った水滴のような〈青い小さな葡萄〉は、希望と切實な願いの芽生えとして生命力をもって生き生きと語られているのだと思われる。

この作品の問いには、カトリック作家として文學と宗教の二律背反の自覺があり、「神なき黄色い日本人」としての遠藤の苦惱が内在していると言えよう²⁰⁾。

5. おわりに

作品『青い小さな葡萄』は、評論家として出發した遠藤が、フランス留學中に模索してきたカトリック作家としての姿勢や主題、創作方法、創作することの意義、決意などを長編小説にお

18) 前掲書『遠藤周作文學全集』第12巻 p.223

19) 本作品における〈青い小さな葡萄〉の意味付けには、「生死のさかい、選擇の余地のない限界状況において、自らの命もかえりみず、人が人にかけて美しくかすかな光」(槌賀七代)、「人間の心と心とを一つに結ぶ愛のきずな」(佐古純一郎)などがある。

20) 今回の論では、こびとと「エバ」との関係から見られるマゾヒズムと神の沈黙については、本作品の中心的なテーマではないので言及しなかった。今後、遠藤の他の作品との関連性についての研究も行われるべきであると思う。

いて具現化した作品である。

遠藤が作家として追求しているのは、カメラの位置をどこにも固定しないということ、そこで神でも天使でもない人間を凝視し、黄色人とか白人とかという外的条件に拘らない一人の人間として、その奥に隠れている魂の領域を描き出すことである。

その試みの初期の作品『青い小さな葡萄』には、二つの大きなテーマである人種の問題と悪の問題が語られている。

作家遠藤を代弁しているような主人公「伊原」において<青い小さな葡萄>とは、小説を書くという創る作業を通して、人間の救済への可能性を探し求めていく「光」のようなものであると思われる。その作業は、文学と宗教という二律背反の矛盾や人種問題を含めた人間のあらゆる外的な条件、また人間の魂の領域に内在しているどす黒い悪の存在をも認めたいうえでの、神の恩寵による救済の可能性への問いなのである。

<青い小さな葡萄>というタイトルが示しているように、その作業は作家遠藤にとってまだ「未熟で微々たる」「青い」「小さな」つぶれやすい「葡萄」ではあるが、彼は希望に満ちている。

花火は夜の空を高く上り、それは無数の火花を散らせながらくずれていった。けれどもその光だけは大空をつきぬけ、どこまでも上昇しつづけて消えることはなかった。(p.88)

これは、作品『青い小さな葡萄』の最後の文章である。人間の創った美しい、しかしむなしさも感じられる花火ではあるが、「無数の火花」の「光」は消えることなく眞暗な大空をどこまでも上昇しつづけているのである。

「伊原」にとって現実の逃げ場であった<青い小さなノート>は、未来の「光」になって、すべての人間の運命に反抗するただ一つの道として<青い小さな葡萄>を見出す「創る」手段となり得たのである。

作品『青い小さな葡萄』は、作品中での葡萄が不毛の土地ヴァルツ縣のものであったように、キリスト文学が荒蕪地と等しかった日本文壇の中で、「普遍的な眞理としてのカトリック」という命題に、渾身の力を注いでいる作家遠藤の切なさや孤獨、希望などの萌芽を示す作品であったといえる。

【参考文献】

- ・『遠藤周作文学全集』第1巻、長編小説Ⅰ 新潮社 1999.4 pp.9～88
- ・『遠藤周作文学全集-「作家の日記」』第15巻 新潮社 2000.7 pp.83～85
- ・『試みの自画像・1 遠藤周作による遠藤周作』青銅社 1985.6 pp.68～87
- ・遠藤周作『石の聲』冬樹社 1970.12 pp.104～105
- ・遠藤周作『私の愛した小説』新潮社 1988.9 p.98
- ・『遠藤周作全集』第12巻 新潮社 2000.4 『私の小説作法』『小説家と批評家との間』『芸術の基準』、第13巻 新潮社 2000.5 『小説技術についての雑談』『現代日本文学に対する私の不満』
- ・槌賀七代『『青い小さな葡萄』の世界』日本文芸研究 1986.7
- ・佐古純一郎『椎名麟三と遠藤周作-『青い小さな葡萄』について』朝文社 1989.11
- ・陸根和『遠藤周作におけるイエス像序説』実践国文学 第四十号 1991.9

K C I

要 旨

作品『青い小さな葡萄』は、評論家として出発した遠藤が、フランス留學中に模索してきたカトリック作家としての姿勢や主題、小説方法などを長編小説において具現化した作品である。

遠藤が作家として追求しているのは、カメラの位置をどこにも固定しないということ、そこで神でも天使でもない人間を凝視し、黄色人とか白人とかという外的條件に拘らない一人の人間として、その奥に隠れている魂の領域を描き出すことである。

その試みの初期の作品『青い小さな葡萄』には、二つの大きなテーマである人種の問題と悪の問題が語られている。

作家遠藤を代弁しているような主人公「伊原」において<青い小さな葡萄>とは、小説を書くという創る作業を通し、人間の救済への可能性を探し求めていく「光」のようなものであると思われる。その作業は、文學と宗教という二律背反の矛盾や人種問題を含めた人間のあらゆる外的な條件、また人間の魂の領域に内在しているどす黒い悪の存在をも認めたくえでの、神の恩寵による救済の可能性への問いなのである。

<青い小さな葡萄>というタイトルが示しているように、その作業は作家遠藤にとってまだ「未熟で微々たる」「青い」「小さな」つぶれやすい「葡萄」ではあるが、彼は希望に満ちている。

「伊原」にとって現實の逃げ場であった<青い小さなノート>は、未來の「光」になって、すべての人間の運命に反抗するただ一つの道として<青い小さな葡萄>を見出す「創る」手段となり得たのである。

作品『青い小さな葡萄』は、作品中での葡萄が不毛の土地ヴァルツ縣のものであったように、キリスト文學が荒蕪地と等しかった日本文壇の中で、「普遍的な眞理としてのカトリック」という命題に、渾身の力を注いでいる作家遠藤の切なさや孤獨、希望などが芽生え出した作品であるといえる。

キーワード：青い、小さな、葡萄、小説觀、人種、悪、魂、光

투 고 : 2005. 8. 31
1차 심사 : 2005. 9. 10
2차 심사 : 2005. 10. 1

住 所 : (300-716) 대전광역시 동구 용운동 96-3 대전대학교 일어일문학과
電 話 : 042-280-2257
e-mail : yookgh@dju.ac.kr